

第192回 求められる旅館経営者の自浄力

(株)飯島綜研 代表取締役社長 孫田 猛

外資の「旅館ターゲット」はいつかの勢いがなくなってきた。しかし、破産や法的整理の案件は今もなお続いており、業界全体としての不況は相変わらずである。

これらに代表される旅館業界の大きな流れをしっかりと捉えることは、自社の今後の対応策を検討する重要な情報源となる。

さて旅館を取り巻く団体は、地元の旅館組合や観光協会、商工会等の身近な団体から、全国的な組織に至るまで、多岐にわたる。

そしてそれぞれの活動は、個々の力では限界があるから、まとめて流れを変えようとする。

まさに政策的な面では、この方法が有効な手段だと思う。しかし、これだけでは不十分だ。ごく一部だとは思いますが、業界や地元の団体活動、エージェントとの付き合いには人一倍熱心なのに、自社の経営となると、他人事のように振舞っている経営者や後継者に出会うことがある。

この類の人たちは、一見当たりがよく、何でもよく知っている。話や文章も上手で地域の担い手として担ぎ出されている。

しかし、金融機関と旅館のスタッフからはすこぶる評価が低い。

旅館経営の改革に取り組もうと、内部の詳細についてヒヤリングすると、概要だけ述べて、あとは担当責任者に聞いてくれとなる。

自館の経営改革が最も大事なことなのに、話をしていると、なぜか業界全体や政治の話題に移っていく。

そして極め付けなのが、自社の経営不振の理由を、政治と金融機関とエージェントと顧客の変化のせいにする事だ。

今、最も大事なことは、他人のせいにする暇があったら、自らが最大の努力と工夫をして事業を再生させよということだ。

結果としてうまくいくのもいかないのも、すべて経営者である自分次第である。この決意を持って自らの旅館を改革していく力を自浄力という。

それにしても世の中人のせいにする傾向が強すぎやしないか。みんなが評論家である必要はない。自ら考え、自らの責任のもと、行動をすべきだ。

この「自浄力」の強さが、これからの経営を左右するといっていいたいだろう。

<http://ik-g.jp>  
[magota@ik-g.jp](mailto:magota@ik-g.jp)